

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ニャキュウサ人の農耕の生態学的, 社会学的研究:
畑地の面積と入手方法に注目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 和明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003637

ニャキュウサ人の農耕の生態学的, 社会学的研究

——畑地の面積と入手方法に注目して——

栗 田 和 明*

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 調査地の概説 | 4) 食生活 |
| 1) 自然 | 4. 畑地の面積 |
| 2) ニャキュウサの人びとと調査地 | 1) 面積 |
| 3) 伝統的社会とその変容 | 2) 1人あたりの畑地面積 |
| 2. 研究の目的と方法 | 3) 畑地の筆数と位置 |
| 1) 土地不足について | 5. 土地の入手 |
| 2) 畑地の入手について | 1) 入手方法 |
| 3) 研究の方法 | 2) 入手時期 |
| 3. 農耕と食生活 | 3) 畑地の所有と人の移住 |
| 1) 農作物と農耕暦 | 6. 考 察 |
| 2) 収 量 | 1) 土地不足の検討 |
| 3) 農作業 | 2) 畑地の入手・譲渡と人の移住 |

1. 調査地の概説

1) 自然

ニャキュウサ・ランドはタンザニアの南西部に位置し(図1), 約5,500 km²の面積をもつ。ニャキュウサの人びとは, ニャサ湖(Lake Nyasa)の北岸, 標高500 m前後にひろがる平地から, ルングウェ山(Mt. Rungwe, 標高2,961 m)の中腹, 標高約2,000 mの地点にまで居住している。ニャキュウサ人の居住地の南側には, 近縁の民族, ソゴンデ人(the Ngonde)が住む。両者の社会組織は似かよっており, 言語も方言の違いでしかない[M. WILSON 1963: 1-5]。両者の居住地はほぼ, タンザニア, マラウイの国境で分けられている。

マラウイ湖北岸の平地の東側はリヴィングストーン山脈(Livingstone Mountains)

* 野外民族博物館リトルワールド

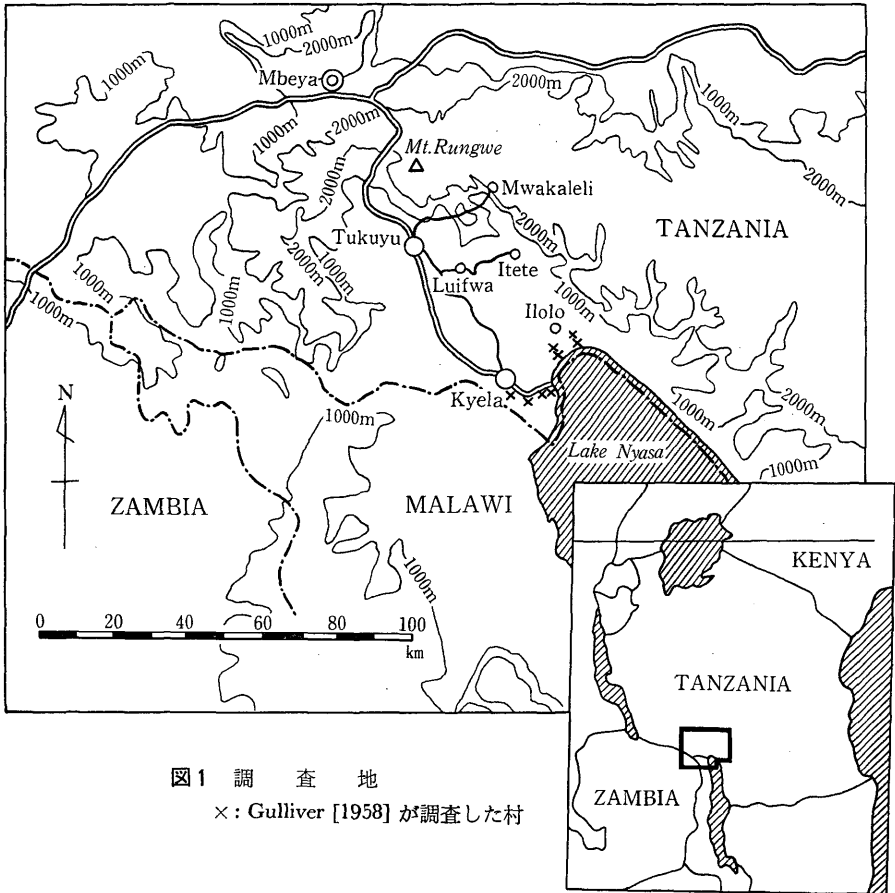


図1 調査地
× : Gulliver [1958] が調査した村

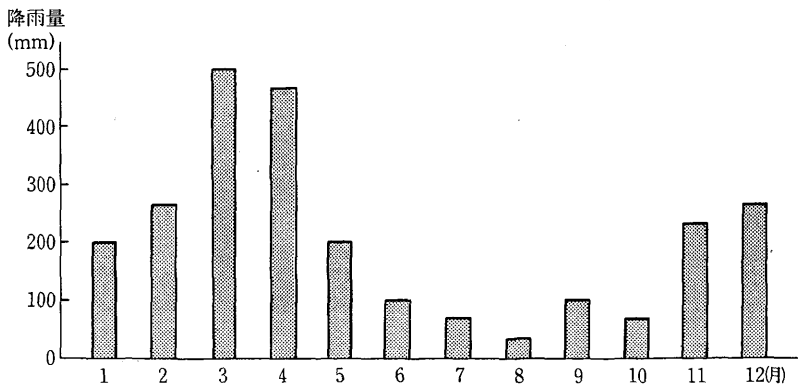


図2 Tukuyu における月別降雨量
1979~1983年の平均
年平均 2510.5 mm
(Rungwe District Office の記録より)

の急斜面で区切られている。平地には水田が広がっており、屋敷地の近くにはプランテンバナナ、アブラヤシ、マンゴーなどが栽培されている。雨季には湖にそそぐ川が増水して水田地帯に水があふれ、ときには水が軒下にまで迫ることもある。本報告ではこの地域を“平地部”と呼ぶ。平地部の南側は、湖面の標高 475 m のマラウィ湖で区切られている。

平地部の標高は北にむかって徐々に高くなり、標高 600~700 m から上は小さな尾根と谷筋が数多く走り、起伏の多い地形となって標高 2,961 m のルングウェ山へと続いている。本報告ではこの地域を先にのべた“平地部”に対して“山地部”と呼ぶ。山地部では、人びとは常畑を斜面につくり、天水を利用した農耕を営んでいる。現在では、山地部のほとんどの部分が畑地として利用されている。作物が栽培されていないところは、休耕地で灌木林になっているところか、そうでなければ急斜面で畑地に適さないところである。

ニャキュウサ・ランドは、東アフリカでは有数の雨に恵まれた地域のひとつである。ここでは雨季は1年に1回、11月から翌年の5月まで続く(図2)。調査地から約 19 km 離れた Rungwe District の中心都市の Tukuyu (標高 1,470 m) での年間降雨量は、1979~1983年の5年間の平均で、2,511 mm である。調査地のルイファ村(Luifwa)は山地部に位置しているが(図1)、標高約 900 m で、Tukuyu よりも標高は低い。降雨量は、ニャキュウサ・ランドの中では、北部の山地部よりもマラウィ湖北岸の平地部の方が多い [THE AFRICAN CLIMATOLOGY UNIT 1961: 3]。したがって、調査地の降水量は Tukuyu よりはやや多いと考えられる。山地部では雨水はすぐに流れ下ってしまうので、雨季に道路が不通になるのは一部のみである。雨季には、山地部の家の土台の土盛りは水分を含んで、苔むしてくる。

調査地は疎開林帯に位置するが [PHILIP 1985: 51]、人為が加わっていない植生はほとんど見ることはできない。ルングウェ山の標高 2,000 m 以上の土地と、ルングウェ山の東につらなるポロト山脈 (Poroto Mountains) にかけては、サファ人 (the Safwa) が住んでいる。ニャキュウサ人とサファ人は家屋の外壁、骨組みなどにタケ (*Arundinaria alpina*) を使用することが特徴的である。建材用に使用するタケは、ニャキュウサ人の住む山地部の中で標高の高い地域、あるいはサファ人が居住する地域で入手される。山地部に住むニャキュウサの一部は、家の補修用に屋敷地内にタケを植えている。

2) ニャキュウサの人びとと調査地

ニャキュウサはタンガニーカ・バンツー系 (Tanganyika Bantu) の民族集団で [MURDOCK 1959: 360], 父系制の親族組織をもっている [G. WILSON 1968a: 11]。彼らは一夫多妻で、既婚男性1人あたり平均1.3人の妻をもち、既婚男性の複婚率は23.8%であった [栗田 1987: 623]。

タンザニアにすむニャキュウサの人口は1967年に約307,000人であった [OMINDE 1975: 63]。タンザニア全体の人口推定では1967年から1986年の19年間に、人口は1.83倍になっている [OMINDE 1975: 60; UNITED NATIONS 1986: 143]。ニャキュウサの人口もこの割合で増加しているとすれば、1986年には約56万人であると推定される。

行政区分の上では、ニャキュウサ人は主に Rungwe District と Kyela District に居住する。これらの District で郵便局、宿泊施設、常設のマーケットがあるのは、それぞれの District の中心都市である Tukuyu と Kyela のみである。報告者が住み込んだルイファ村は、Tukuyu から、教会や病院がある Itete に通ずる道路沿いに位置する (図1)。この道路から分かれて、大型トラックが通行できる幅の道が、ルイファ村の尾根筋の一つを通っている。バナナを出荷するために、また、最近では都市で燃料にするための薪の集荷に、トラックがこの道に入ってくる。この道は雨季にはぬかるんで、トラックは入れなくなってしまう。

ルイファ村の行政上の区分は、Mbeya Region (Mkoa wa Mbeya), Rungwe District (Wilaya wa Rungwe), Pakati Division (Tarafa ya Pakati), Kisiba Word (Kata cha Kisiba), Luifwa Village (Kijiji cha Luifua) である。村内の20歳以上の男女の人口は、1984年の税金納付時に行なわれた調査で約1,500人であった [Kata の役人からの私信]。村の面積は 14 km² 程度である。さらにルイファ村は Kitongoji と称される単位で3分されている。この Kitongoji の占める空間は、長さ 2 km 程度の尾根筋をおおっており、隣の Kitongoji とは谷で区切られている。ルイファ村の中には、小学校が2校設置されている。ルイファ村は Kata の中心地であり、Word Secretary (Kative Kata) の事務所、裁判所、病院も設けられている。1986年からは、マーケットが、週に1回、隣村の道路わきの空き地を中心に開かれている。この空き地はルイファ村からは小さな谷をはさんでいるだけなので、ルイファ村の人びとも多数でかけていく。ここには、簡単にタケで骨組みをつくり、中にベンチをおいた酒場が20前後もできて、人々は買物とおしゃべり、飲酒を楽しむ。

山地部では、屋敷地は傾斜がゆるやかな尾根筋にかたまっている。それぞれの屋敷地はプランテンバナナの畑に囲まれているので、屋敷地と隣の屋敷地は最低 50 m は離れている。一つの尾根から、谷を隔てた隣の尾根を眺めると、屋敷地の周囲に植えられたバナナの葉の色で、尾根筋の道の両側にはバナナが隙間なく植えられており、この道からバナナ畑の中に、屋敷地が数十メートルから百数十メートルの間隔で見える。午後になると、マンゴーの木の下では、椅子に座って雑談をしている人びとが見える。屋敷地のある尾根筋から水平距離で百メートル、標高差数十メートルも谷に下っていくと、そこには小川が流れており、この水が人びとの生活の用に供されている。

3) 伝統的社会とその変容

(i) 伝統的社会

本報告では、G. ウィルソンや M. ウィルソンが1930年代に調査して復元した19世紀後半のニャキュウサ社会を、“伝統的な社会”と呼ぶことにする。これは、1891年にドイツから教会のミッションがはじめてこの土地に入る以前の社会を意味している。

ニャキュウサの伝統的な社会を、主に G. ウィルソンの記述に基づいて簡単に紹介しておく [G. WILSON 1936]。ニャキュウサは首長制をもつ社会で、1930年前後には約16万の人口が、100あるいはそれ以上の数の首長国に分かれていた [M. WILSON 1963: 2, 3, 12]。パラマウント・チーフも存在せず、首長国同士の政治的結合は希薄であった [G. WILSON 1968a: 14]。首長 (*malafyale*) は、彼の父系親族以外の長老たちに支えられて、国内の政治、司法、軍事、呪術上の権威を保っていた [M. WILSON 1963: 29]。

Lake Nyasa と Lake Rukwa にはさまれた地域は、西方からのバンツュー系の人びとの移動経路と、東方からのアラブ人の交易路が集約された地域で [KNIGHT 1974: 5]、多くの民族集団がニャキュウサ・ランドの北側を通過している。伝承によれば、ニャキュウサの首長の祖先は、ニャキュウサ・ランドの東部に住んでいるキング人 (the Kinga) を出自とし、15世紀後半か16世紀前半に東方から現在のニャキュウサ・ランドに進入してきた [M. WILSON 1977: 9]。彼らは、先住の人びとにウシと鉄器をもたらし、火の利用方法を教えた [1977: 8]。

それぞれの首長国は、6~12の年齢村(後述)を含み、それぞれの年齢村は約30家族からなっていた。それぞれの家族は、1人の既婚男性、彼の1人または複数の妻、そして彼らの未婚の子供たちから構成されていた。首長国の大きさには、成人男性の数で100~3,000人と規模の差が大きかった [G. WILSON 1936: 269, 275, 283]。

調査地付近では、1980年代の行政区分上の村が占める地理的空間は、伝統的社会で首長国が占めていた空間に、ほぼ一致している。また、人口の上でも、どちらも数千人規模である。したがって、1980年代の“村”は伝統社会の首長国内にあった年齢“村”とはまったく規模が異なる。

伝統的なニャキュウサ社会の村は、age village (*ikipanga*)、年齢村と呼ばれるものであった。age village とは、ほぼ同年齢の男が一つの村を作って一緒に住むものであり、いくつかのリネージの成員を含んでいた。ニャキュウサの少年たちは6歳前後から牧童として父親のウシを追った。彼らは10~11歳になると、父母の村の近くの利用されていない土地に牧童仲間が集まり、自分たちの小屋を建て、少年たちの村をつくった。少年たちの村ができた当初は、少年が2人で共同の小屋を建てる場合もあった。少年たちが自分たちの小屋に住むようになると、ウシを追う仕事は弟たちにゆずり、少年たちは父親の畑を耕す仕事をした。この時期には、少年たちは朝から父親の畑に通って畑仕事をし、母親が用意してくれた食事をとった。そして、夜だけ自分たちの小屋に戻って寝た。少年たちの村には、あらたに10~11歳になった少年たちが、順次加入してきた。しかし、少年たちの村の最年長者が17歳位になると、あらたな少年の加入は拒まれるようになった。こうして、年齢が10歳~17歳までの少年から構成される村ができあがった。あらたに10~11歳に達した少年たちは別の村を作り、こういう村がつきつぎにできあがっていった。少年たちはやがて20歳代の男子青年（以下、青年）になり、結婚する者もでてくる。結婚しても青年たちの村からは出ず、そこに妻と住むための家を建てた。未婚の青年は父親の畑に通い、既婚者は自分の畑地を入手して耕した。

やがて、首長の息子が30才台前半になると、首長国を2分割して首長の2人の息子に譲る一連の儀式 *coming out (ubusoka)* がおこなわれた。この儀式で、首長の第一夫人と第二夫人の長男は首長として認知され、彼らの呪力を高める儀礼がほどこされ、正式な結婚をする。ただし、首長国の大きさが十分でない場合には、1人の息子のみで首長位を譲って、首長国の分割がおこなわれないこともあった。大きな首長国では3分割される例もあった。

首長国内の各村のリーダーは *great commoner (ifumu)* と呼ばれており、彼らは首長の家系からは選出されなかった。グレイト・コモンナーには、年齢村の人びとからの人気が高いこと、紛争を鎮めたり、戦争をおこなうときに指導力を発揮できること、村を災厄から守る呪術的な力があること、富裕で尊敬される家系の出身であることなどが求められた [G. WILSON 1936: 276]。Coming out のとき、今までの首長

と長老たちによって正式に各村のグレイト・コモンナーが決定された。青年の村には、まとめ役をつとめる者が coming out の前におのずとできていた。このまとめ役がグレイト・コモンナーとして指名されることが多かった。

Coming out のとき、首長国内の各年齢村の居住地、畑地、放牧地の場所が見直された。とくに、あらたにグレイト・コモンナーがきまった年齢村の構成員がどの土地を使用するかが問題になった。首長国がそのテリトリーを広げることができる場合には、彼らにあらたな土地を与えた。こうして、2分割されてできた新しい首長国が利用する土地の面積の合計は、結果的に前の世代の首長国のものよりも広がった。首長国の土地の拡張ができない場合は、年配者からなる年齢村は、より条件のよい畑地や居住地を息子たちの年齢村に譲り、より条件の悪い土地に移った。前の首長が死亡するまでは、あらたな2人の首長との間に微妙な力関係のバランスがとられる。しかし、この状態は長くは続かず、前の首長は新しい指導者を求める人びとの期待を受けて、短期間の内に死んでいった[M. WILSON 1963: 29-30]。年配の男性の死にともなって、彼の妻たちは弟や息子に相続された。こうして年配者の年齢村の人口も、所有している土地の面積も、次第に小さくなっていった。同年齢層の男性を中心にした age village は、それを構成する男たちが10歳のときに形成されてから、結婚し、親の世代から政治・司法・呪術上の権力を譲られ、それらをさらに自分たちの子の世代に譲るまで続いていったのである。

(ii) 1980年代の社会

1891年にキリスト教会がニャキュウサ・ランドに入った後、キリスト教化、ドイツ・イギリスによる植民地化、独立、タンザニア共和国の社会主義による国家建設と、ニャキュウサ社会は目まぐるしい変化を経験し今日に至った。とくに、ニャキュウサ・ランドは、タンザニアでキリスト教化が最も早くおこなわれた地域の一つであった。キリスト教化は、商活動への積極的な参加にみられるようなニャキュウサ人の進取の気性と、学校教育の普及とあいまって、ニャキュウサ人の経済観念、時間観念に大きな影響を与えた。ここでは、1910年代生まれの老人の生年も記憶されているのである。

報告者は、1984年にニャキュウサ・ランドで調査をおこない、伝統的な居住形式の変化に注目して報告した[栗田 1987]。その当時、屋敷地内には、1人の既婚男性と、彼の1人、または複数の妻、その子供たちが住んでいた。この一夫を中心とした複婚家族による居住は、19世紀後半の伝統的な社会から続いている居住形式である。しかし、報告者が調査した1980年代には coming out を伴う首長国の分割は完全に姿を消してしまっていた。未婚の青年たちが自分の小屋をもつことも少なくなり、彼らの55

％は結婚するまで親の屋敷地内にとどまっていた。屋敷地から離れて独立し、自分1人の小屋を建てる場合も、親の畑地に余裕があれば、親の畑地内に小屋を建てていた。青年たちの家が数軒かたまっている場合も、その構成員、そこに住むにいたった経緯、をたどってみると、age village とは言えないものであった。

1970年代になってから金銭による畑地の売買がニャキュウサ・ランドでみられた。1961年のタンザニア独立後、土地の個人所有は公式には禁じられており [NYERERE 1966: 166, 167], 大統領はタンザニア国内のあらゆる土地を収用できる権威がある [LWOGA 1985: 68]。しかし、独立後多くの農民が私有地を獲得したとの報告もあり [OMARI 1980: 49], 農地の個人所有化がチャガ人、スクマ人が住む地域をはじめとして、タンザニア各地で始まっているともされている [KNIGHT 1974: 244]。都市では宅地は、政府機関によって区画され売りだされている。ニャキュウサ・ランドの農民も、畑地の使用権ではなく所有権を売買している意識で取引きをしている。

畑地の個人所有化をすすめる農民と、個人所有を認めない政府との間のずれが、両者の間で土地の所有権をめぐる係争になった場合に鮮明になる。長い係争のすえ、いままで土地を利用していた農民の主張をいれて、政府が、宅地の拡張計画、学校・工場の建設計画を変更した例もあるが [LWOGA 1985: 55-80], このような変更はまれな例である。現時点でも個人の土地所有権は法的には認められていないが、土地は、売買、抵当権の設定、貸借の対象になりつつあるのが実状だといつてよい。

2. 研究の目的と方法

1) 土地不足について

ニャキュウサ人の社会は、1930年代から多くの人類学者によって調査されてきた。ニャキュウサは age village, coming out, 首長国制, ウィッチなどの社会生活上、精神生活上の特異な慣習をもっており、研究の焦点がそれらの記載に集中していた傾向がある。逆に、生態学的観点に立ったニャキュウサの研究は少なかった。この点について、具体的な情報を提供しているものには、下記のようなものがある。

G. ウイルソン [G. WILSON 1936, 1951, 1968a, 1968b] と M. ウイルソンは1934年から1938年にかけてニャキュウサ・ランドで調査をおこなった。彼らは1930年代の調査時のニャキュウサの生活を記述するとともに、19世紀後半の社会についても、聞き込みによって復元を試みた。M. ウイルソン [M. WILSON 1950, 1959, 1963, 1976,

1977] は、夫の死後も、1955年に調査をおこなっている。ウイルソン夫妻が復元した19世紀後半の社会と、彼らが調査をおこなった1930年代、1950年代の社会を比較すると、age village, coming out を中心とする伝統的な社会制度が、大きく変化していることが明らかにされた。M. ウイルソンは、coming out を伴う age village の形成には十分な広さの土地が必要であり、新しい世代の age village を設けるための土地が不足し始めたことが、age village 崩壊の原因の一つであるとした [M. WILSON 1963: 173]。

P. H. ガリバーは1954年に調査をおこない、調査当時の土地問題について報告し、出稼ぎに従事する青年たちの数が多いのも、土地をめぐる係争が頻発するのも、土地不足と関係があることを示した [GULLIVER 1958: 28, 37]。

つづいて P. M. ヘッケンらは1966-1968年に調査をおこない、耕地のパトロンクライアント関係について報告した。彼は、調査対象とした109人の農業経営者の中に19人のパトロン、56人のクライアントがいることを示し¹⁾、少数のパトロンが、多くの農民に土地を貸して、経済上だけでなく、村内の政治的実権を握っていることを示した [HEKKEN and VELZEN 1972: 19-43]。

これらの研究では age village の崩壊、高頻度の出稼ぎ、土地をめぐる係争、パトロンクライアント関係の成立等の原因の一つとして、土地不足をあげている。しかし、実際に一人ひとりほどの程度の面積の畑地使用し、どれほどの収穫をあげているかについては報告していない。これらの研究では、耕地と農作業の実態には触れずに、社会変容を説明する原因として土地不足をあげているだけであったのである。

また、上記の研究がすすめられてきたのは、ニャキュウサ・ランド南部の平地部であった。M. ウイルソンの調査地は特定できないが、P. H. ガリバーの調査地のほとんどはニャサ湖岸から 5 km 以内にあり、一番離れているところでも湖岸から 20 km 程度であった (図1)。P. M. ヘッケンはニャキュウサ・ランド内の各地で調査しているが、Ilolo での調査結果に基づいて上記のパトロンクライアント関係を示した。Ilolo もニャキュウサ・ランド内の平地部に位置している (図1)。これに対して、報告者の調査地ルイファ村は、標高約 900 m の山地部に位置し、ニャサ湖岸からは直線距離にして 40 km ほど離れている。

本報告では、これまでの諸報告が指摘してきた土地不足の実態を検討していく。畑

1) Hekken らは表の形式で、それぞれのパトロンと関係しているクライアントの数を示している。畑地の貸出しを行なっているすべての農民を網羅したとは記述していない。したがって、調査地内の規模の小さいパトロンが、彼の示した表には示されていない可能性がある。また、複数のパトロンと関係しているクライアントが彼らの表に何回も計上されている可能性もある。

地面積を計測し、いままで報告がなかったニャキュウサ・ランドの山地部においても、はたして土地不足が切迫した状況になっているのか否かを検討する。ニャキュウサの農民の生活が成り立っていくためには、どれほどの面積の畑地が必要なのか、生活するのに十分な広さの土地を所有している農民の割合はどの程度で、十分な畑地をもたない農民はどのようにして生活しているのか、などの観点から報告をすすめる。これによって、ニャキュウサ・ランドの人びとの生活を生態学的観点から把握することができる。この結果にもとづいて、ニャキュウサ人の土地利用を、再検討しようとするのが本報告の目的である。

2) 畑地の入手について

つぎに、本報ではニャキュウサの畑地の入手方法の現状について報告する。アフリカにおける土地所有あるいは土地利用に関しては、これまでに多くの研究がみられる。たとえば P. シプトンは、土地所有が親族集団に基づいてなされる社会と居住している地域に基づいてなされる社会の二つに分けて、それぞれの社会で、土地の獲得の難易、土地の配分のされ方、村への新入者の扱われ方、人びとの移住の頻度、伝統的な政治形態のあり方、などがどのようになるかを論じた [SHIPTON 1984]。また、R. M. ヘクトは、コートジボワールの農民の土地入手方法を歴史的にたどった。彼は、Sub-Saharan 地域における土地所有は、一般的に、地域、あるいは親族集団に基づいた権利から、個人単位の権利に今世紀になって大きな変化を見せていると述べている [HECHT 1985: 319]。

M. ウイルソンと P. H. ガリバーは、ニャキュウサ社会における畑地の入手方法について、他の村から移住者に対して畑地がどのように提供されるかを記述した。彼らの報告から、1930年代には人びとは移住をくりかえし、出生した村以外の村に移住した場合も、畑地の入手は容易であったことがうかがえる。しかし、これらの研究では事例の記述がされているのみで、量的なデータが示されていない。

ニャキュウサ社会で、畑地の入手方法と入手時期に注目した研究が不十分だったのは、彼らの社会制度にも原因があった。前章で示したように、伝統的な社会では、首長が次の世代の者に交代するつど、首長国内の各年齢村の居住地、畑地、放牧地が再編成され、各個人の土地の所有権は継続していかなかった。巨視的には土地の所有権は、年齢村から次の世代の年齢村へと移るもので、各個人の土地の入手方法や入手時期は、あまり注意を払う必要のない問題であったのである。個人から個人への土地の相続は、兄が死亡して、兄がいた村に弟が入る場合などに限ってみられたが、次の

coming out の時には、相続した土地の所有権は消滅してしまった。個人間の土地の相続は、次の coming out がおこるまでの時間的に限られた現象であったのである。

R. M. ヘクトが示したように、土地所有形態の歴史的变化は大きい [HECHT 1985: 319]。ニャキュウサ・ランドでは、1980年代には首長の交代も、村の再編成もおこなわれておらず、土地所有の形態は伝統的形態から大きく変化している。畑地を次世代の年齢村の構成員に譲渡するきっかけとなった coming out を伴う首長国の分割は、現在ではみられないので、各個人の畑地入手方法や入手時期が、新たな問題として注目されるべきであるにもかかわらず、ニャキュウサ・ランドでの土地利用にかんする1980年代以降の報告はない。本報告では、現時点でのニャキュウサ人の畑地の入手方法の特徴を明らかにし、社会生活との関連を示す。

3) 研究の方法

報告者の調査時の典型的なニャキュウサの家族は、1人の既婚男性と、彼の1人または複数の妻と、その未婚の子供たちから構成されており、1家族の中に複数の既婚男性が含まれていることはなかった [栗田 1987: 628]。複婚の場合は、それぞれの妻の家が、一つの屋敷地内で中庭をかこんで配置されていた。家族構成員のなかには、仕事や就学で長期間ニャキュウサ・ランドを離れている者もあり、その期間には、2～3カ月から数年とさまざまであった。2カ月以上の長期間にわたる不在者を除外した、現時点で同一屋敷地内で生活を共にしている人びとの集まりを、本報告では“世帯”と呼ぶことにし、以下の記述は、世帯を単位としておこなう。

各世帯の既婚男性を“世帯主”とする。世帯主が出稼ぎのためにニャキュウサ・ランドを長期にわたって離れることもあるが、このような場合には家族員も連れていくので、世帯主を欠く世帯は少なかった。青年の一部は小屋をつくって1人で生活するので、未婚男性1人だけという世帯もできる。このような青年も、世帯主と見なす。20代で結婚する男性もいるが、調査対象となった10代・20代の世帯主は全員独身であった。小学校卒業以後の独身青年の55パーセントは両親と同一屋敷地内に生活しており、世帯主ではなかった [栗田 1987: 627]。伝統的社会では、未亡人は亡夫の弟あるいは co-wife の息子に相続され、女性は必ず男性世帯主がいる屋敷地内で生活していた。現在では、未亡人が1人で生活する場合もあるが、調査対象の中には、既婚男性がいない世帯はなかった。

ある農民が使用している土地には、彼が村の土地から譲り受けたもの、親族から個人的に譲られたもの、金によって購入して所有しているもの、借用しているものと、

多様な畑地が含まれている。また、現在は、土地の所有権は伝統的な首長による所有から、個人所有、あるいは国家による所有へと大きな変化の過程にあり、誰が土地の正当な所有者であるかの一致した見解がニャキュウサ人の中で必ずしも得られない。したがって、その畑地の法的な所有者がだれに特定されようとも、ある農民がその土地を使用していたら、その土地は彼の畑地であり、彼が所有者であるとして本報では論を進める。

報告者は1983年12月～1984年1月、1984年9月～11月、1987年10月～1988年2月の期間、ニャキュウサ・ランドで住み込み調査をおこなった。本報告で示す畑地に関するデータは、1987年～1988年の調査時のものである。調査対象となった人たちの年齢は1988年末で示してある。報告者は、Tukuyu-Itete 間の道から枝分かれした道沿いの家に住んでいた。この道沿いの屋敷地の各世帯について、以下のような項目の調査をおこなった。世帯の構成員、世帯主のライフ・ヒストリー、各世帯の畑の数、面積、栽培作物、休耕している場合はその休耕年数、各畑地の入手方法などである。各畑地の面積は、歩測とコンパスによって測定した。

3. 農耕と食生活

1) 農作物と農耕暦

調査地付近では、家は屋根筋の平坦地にバナナ畑に囲まれて建ち、その外側の緩斜面にはトウモロコシ畑がつくられていた。ここまでは人手がよくいき届いていた。屋敷地からみて、トウモロコシ畑からさらに離れたところにイネの畑があった。これは、人が立つのが困難なほどの急斜面につくられることもあった(写真1)。

畑地は、ほとんどの場合は長方形に近い形をしていた。ときには長方形にこぶが付いたような形のもの、小さな尾根を等高線に沿ってぐるりととり囲んでいるものなどもあった。これらの不定形の畑も、ひとつづきであれば1筆の畑とした。ひとつづきの畑の中で、夫が使用している区画と妻が使用している区画を区別できることもあるが、これも全体で1筆の畑とした。1筆の畑の面積には変異が大きく、調査対象となった畑地では0.04～7.04 haであった。1筆の畑のなかで、1種類の作物を栽培していることも、多種類の作物を栽培していることもあった。

調査地で確認した40種の作物の種類と栽培の頻度を表1に示した。主食用となるのは、トウモロコシ、プランテンバナナ、イネ、サイトウ(インゲンマメ)である。イネは、平地部では水稻だが、山地部では陸稻であった。調査地付近では、トウモロコ



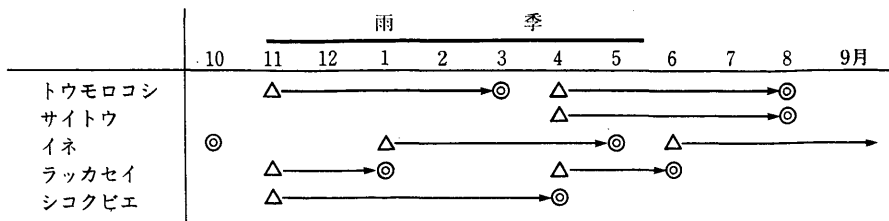
写真1 急斜面につくられたイネの畑

シ粉のウガリ, バナナ, 米飯を主食にしていた(3章4節)。平地部ではバナナの栽培は山地部ほどさかんではなく, 米飯を食する機会が多かった。

主要作物の農耕歴を図3に示した。雨季が始まってから, トウモロコシとイネの播種を始める。トウモロコシとイネは, 普通は1年に1回しか収穫しない。2回収穫することも可能であるが, 1回目の栽培が失敗した時のみおこなう。ラッカセイは1年に2回収穫することが多かった。

2) 収量

化学肥料の利用は望んでいるものの, 経済的な理由で購入できない農民も多い。また, 肥料は常に入手不可能とはかぎらないので, 施肥の量と時期が適切であることは少ない。連作によって収量が低下することは一般に認められており, トウモロコシとシコクエビの畑では適宜休耕している。しかし, 休耕の間隔は施肥の状態などにも大



△: 植え付け, ◎: 収穫

図3 主な作物の農耕暦

△: 植え付け, ◎: 収穫

表1 調査地での栽培作物とその頻度

English name	Nyakyusa	Swahili	Scientific name	Frequency
banana	<i>matoki</i>	mgona	<i>Musa</i> spp.	CCC
maize	<i>filonbe</i>	mahindi	<i>Zea mays</i>	CCC
rice	<i>punga</i>	mpunga	<i>Oryza sativa</i>	CCC
finger millet	<i>amalesi</i>	ulezi	<i>Eleusine coracana</i>	CCC
taro	<i>masinbi</i>	myugwa	<i>Colocasia esculenta</i>	CCC
mangoes	<i>mienbe</i>	mwenbe	<i>Mangifera indica</i>	CCC
cardamon*	<i>iliki</i>	iliki	<i>Elettaria cardamomum</i>	CCC
coffee*	<i>kahawa</i>	kahawa	<i>Coffea</i> spp.	CC
red pepper	<i>mbilipili</i>	pillipili	<i>Capsicum annum</i>	CC
kidney bean	<i>indima</i>	maharagwe	<i>Phaseolus vulgaris</i>	CC
pumpkin	<i>iliyanyungu</i>	mboga	<i>Cucurbita maxima</i>	CC
guava	<i>gwajabi</i>	mpera	<i>Psidium guajava</i>	CC
lemon	<i>malalanji</i>	mlimau	<i>Citrus limon</i>	CC
lime	<i>ndimu</i>	ndimu	<i>Citrus aurantifolia</i>	CC
pawpaw	<i>mapapajwa</i>	papai	<i>Carica papaya</i>	CC
avocado pear	<i>katapera</i>	kasokera	<i>Persea americana</i>	CC
pigeon pea	<i>imbange</i>	mbaazi	<i>Cajanus cajan</i>	CC
pineapple	<i>vinanasi</i>	nanasi	<i>Ananas comosus</i>	C
tomato*	<i>inyanya</i>	nyanya	<i>Lycopersicum esculentum</i>	C
tea*	<i>chai</i>	chai	<i>Camellia sinensis</i>	C
groundnut	<i>amasyabala</i>	karanga	<i>Arachis hypogaea</i>	C
cassava	<i>majabu</i>	muhogo	<i>Manihot esculenta</i>	C
onion	<i>ifitungulu</i>	kitunguu	<i>Allium cepa</i>	C
sugarcane	<i>myuba</i>	muwa	<i>Saccharum officinarum</i>	C
turmeric	<i>akjinja</i>	bizari	<i>Curcuma domestica</i>	C
bambara groundnut	<i>injugu</i>	njugu mawe	<i>Voandzeia subterranea</i>	C
cacao*	<i>mikokola</i>	mcacao	<i>Theobroma cacao</i>	R
cashew nuts*	<i>imikoresh</i>	korosho	<i>Anacardium occidentale</i>	R
oil palm*	<i>mawese</i>	mchikichi	<i>Elaeis guineensis</i>	R
potato	<i>indofanya</i>	viazi ulaya	<i>Solanum tuberosum</i>	R
sweet potato	<i>imbatata</i>	viazi vitamu	<i>Ipomoea batatas</i>	R
sunflower	<i>pangajeje</i>	alizeti	<i>Helianthus annuus</i>	R
orange	<i>luki</i>	chungwa	<i>Citrus sinensis</i>	R
sesame	<i>burunya</i>	ufuta	<i>Sesamum indicum</i>	R
tobacco	<i>ngambo</i>	tumbako	<i>Nicotiana tabacum</i>	R
ginger	<i>enbuiga</i>	tangawizi	<i>Zingiber officinale</i>	R
gourd	<i>mbale</i>	mbuyu	<i>Lagenaria siceraria</i>	R
cotton	<i>mitunda</i>	panba	<i>Gossypium hirsutum</i>	R
egg plant	<i>imbilingania</i>	ilingani	<i>Solanum melongena</i>	R
passion fruit	<i>imisyunguti</i>	matunda	<i>Passiflora edulis</i>	R

CCC: 既婚者のほとんどすべての家で栽培。CC: 非常によく見られる。C: 普通に見られる。

R: 稀である。* 換金作物

大きく左右されるので, 一般的な休耕のスケジュールを抽出することは困難である。

単位面積あたりの収量は, 聞込みによって調査し, トウモロコシは 1 ha あたり 0.75~1.2 ton の収量があった。施肥が十分で, 間引きもおこなっている人で, 1.2 ton/ha 程度であった。シコクエビの収量は 0.50 ton/ha 程度であった。イネの収量は, 0.40~0.75 ton/ha 程度で, 収量が低く, 連作による地力への影響はあまりない。バナナの収量については, ニャキウサ・ランド内でのデータは得られなかった。

イネの畑の休耕は, 地力低下のためではなく, 畑地を利用する労働力が得られなかったためである場合もあった。畑地を長期間休耕したまま放置しておく, 再利用時の木の伐採が重労働になるし, 所有権上の問題もおこりやすい。休耕地として放置する期間は最長3年程度であった。4年以上放置しておく, その土地は村のものになってしまう, 村への移住者や, 十分な土地をもっていない青年に割り当てられてしまう²⁾。

3) 農 作 業

イネ, サイトウ, トウモロコシ, シコクエビの栽培は男女の分業がはっきりしていた(表2)。稲作はほとんどの過程を女がおこない, イネの栽培は女が携わるものとされていた。収穫したコメは女が自分の裁量で換金して, 生活必需品を購入するのに充てていた。ただし, イネの畑も耕起は男がおこなうので, 収穫物の一部を男が得る場合もある。一方, シコクエビの栽培は男性の仕事で, 収穫物の売上げは男の現金収入源となっていたが, 妻が収穫物の一部を酒作り用を使用する場合もあった。換金作物であるコーヒーとカルダモンは, バナナの木の間に植えられており, これらの収穫は夫のものになることが多かった。

単婚の家族では, 夫婦の間で畑を分けるということはないが, 複婚の場合には, バナナ, トウモロコシ, キャッサバの畑を, 夫とそれぞれの妻の使用分に分割しており,

表2 農作業の男女分業

	耕起	植付け	除草	収穫
イネ	♂	♀	♀	♀
サイトウ	♂	♀	♀	♀
トウモロコシ	♂	♂♀	♂♀	♂♀
シコクエビ	♂	♂	♂	♂♀

♂: 男の仕事 ♀: 女の仕事

2) この4年という年限は必ずしも厳格ではない。5年以上と表現する人もいる。



写真2 イネの畑の除草作業（右側が除草前、左側が除草後）

収穫物もそれぞれ処分できるようになっていた。畑地の分割をしている場合、それぞれの妻の畑の面積の方が夫の畑よりも大きい。施肥は、畑を割り当てられた者の責任で行なうことになっているが、結果的には同じ世帯の中では施肥量が大きく異なることはない。畑の耕起は、女性が使用している区画も含めて、すべて男性がおこなう。夫は息子がいればその力をかり、妻たちの畑の耕起をおこなう。

参加するメンバーを決定する規則や、互酬制の規則が整っているような労働協力の慣習はみられなかった。老人、負傷者の畑を、村内の青年たちが集まって耕すのが観察された。このときには、謝礼として、米飯、トウモロコシのウガリ、サイトウを煮たもの、酒が振舞われた。鶏肉が振舞われることもあるが、これは珍しい例である。労働協力のために集まる人数は、普通6～8人、多いときでも30人以下であった。青年たちは1年に1～4日をこの種の労働に費やす。

イネの畑の除草を、畑が近隣の者同士が一緒におこなうことがあった。お互いの畑で1日ずつ一緒に除草作業をするのである。しかし、これは必ずしも一般的慣習だとは言えない。イネの畑の除草は重労働で、長時間畑にしゃがみ込んで作業をおこなわなければならない。ニャキュウサの普通の農作業は、夜明け前後から始め、午前10～11時には終わるが、イネの畑の除草作業は午後2時、3時、あるいは、夕方まで続くこともあった。除草の前後の様子を写真2に示した。

4) 食 生 活

調査地の2世帯の食事内容の記載を2人の青年に依頼した。2世帯とも、普通、1

表3 食事の内容(2世帯, 912回の食事に供された回数を示す)

	朝	昼	晩	合計		朝	昼	晩	合計
ウガリ	15	98	92	205	ポリッジ	135	1	1	137
バナナ	16	100	69	185	紅茶	106	6	0	112
コメ	9	44	105	158	パン	24	6	0	30
サツマイモ	3	17	23	43	サイトウ	2	34	64	100
サトイモ	1	5	13	19	アヴォカド	2	14	2	18
キャッサバ	1	9	5	15	サトウキビ	3	7	1	11
カンデ*	2	3	6	11					
野菜煮	14	55	61	130	その他	6	29	13	48
魚	5	56	42	103	(15種類)				
肉	3	29	54	86					
酸乳	5	33	21	59					
キャベツ	2	13	18	33					
卵	3	18	8	29					

*: サイトウとトウモロコシを煮たもの

日3回の食事をとっていた。1世帯については、168日間の記録が得られた。この世帯の場合、168日間で7日は1日2回しか食事をとらなかった。記録をとった青年が、ルイファ村以外の Mbeya や Tukuyu に出かけて、そこで食事をした38回を除くと、ルイファ村内での食事として459回が記録された。もう1世帯の場合は、192日間の食事内容が記録された。そのうち11日は1日2回の食事しかとられず、ルイファ村外での食事は22回であった。したがって、この世帯についても453回の食事内容の記録が得られた。この2世帯の食事内容を合計して表3に示した。全部で34種類の食物あるいはその材料名が記録され、そのうち記録された回数が10回以上のものを個別の食物名で示した。

ポリッジ、紅茶、パンは、ほとんどの場合は朝食として利用された。パンは紅茶と同時に食べられることが多く、ポリッジは単独で食べられた。ポリッジを食べる回数と、紅茶をとる回数の合計は249回になった。全体の食事回数の3分の1の304回を朝食と考えれば、ポリッジと紅茶で朝食の82パーセントを占めた。ポリッジは、フィンガーミレットかトウモロコシの粉でつくった。世帯によっては自家で栽培しているコーヒを朝飲むこともあった。

朝食用の食物以外は、主食として用いられるものと、主食に添えられて供せられる、いわゆるおかずに分けることができる。野菜煮、魚、肉、キャベツ、卵は単独で食べられることはなく、必ず他の食物と組み合わせてとられ、おかずと考えることができる。野菜煮、魚、肉、キャベツ、卵は381回記録された。全体の食事回数の3分の2の608回を昼食と夕食とすると、昼食と夕食の63パーセントはこれらのおかずと共にとられ

ていたことになる。野菜煮は、カボチャの葉、マメ類の葉、イモ類の葉を、トマトやつき砕いたラッカセイとともに煮て塩で味付けしたスープである。魚は薫製にした淡水魚で、煮戻して食べられた。キャベツはスープにして食べられた。酸乳は59回とられたが、主食物を食べた直後にとられる場合が55回で、酸乳だけで食事をすませてしまう例は59回中4回しかなかった。

主食となる作物は、トウモロコシ、バナナ、イネ、サツマイモ、サトイモ、キャッサバである。これらの作物からの食事は合計して636回記録された³⁾。これは全体の食事回数の3分の2を上回る回数で、昼食と夕食には主食となるものが1品以上必ず用意されていたことを示す。事実、これらの食物は朝とられることは少なく、昼と夜に多くとられていた。このなかでは、トウモロコシ、バナナ、コメが中心で、それぞれ205回、185回、158回と、これらの3種のメニューで、548回を占めた。ほとんどの場合、トウモロコシは粉にしてウガリにされた。バナナは煮て、あるいは焼いて食べられた。

サイトウに油を加えて煮た料理は、これら主食となる食物と同じように、そのみで、あるいは他のおかずを添えて食べられた。しかし、一方では、これ自体がおかずとして、米飯と一緒に食べられることもあった。アヴォカド、サトウキビは間食としてときどき用いられた。

4. 畑地の面積

1) 面積

各世帯が所有する畑地の面積に対する休耕地の割合を検討した。本報告では、“休耕地”とは、1987年10月～1988年2月の調査時に作物を栽培していなかった畑地、あるいは耕起、灌木の伐採、などの農耕の準備がおこなわれていなかった畑地をいう。したがって、農耕シーズンの後半の3月以降に利用される可能性のある土地も含まれている。

表4 各世帯の休耕地の割合

世帯数	休耕地の面積の割合 (%)									合計
	0	1~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80	
9	2	9	3	4	2	1	1	2	33	

3) トウモロコシとサイトウを一緒に煮た料理、カンデは含む。サイトウだけを煮た料理は含まない。

表5 各世帯が所有している畑地面積

世帯主の年齢 (才代)	各世帯の畑地面積 (ha)						平均 (ha)
10・20	0.16	0.22	0.73	2.32	2.77		1.24
30	0.47	0.95	1.47	3.55	3.57		2.00
40	0.85	1.38	1.96	3.87	6.16	9.12	3.89
50	3.24	3.26	4.01	4.97	6.69	7.98	5.03
60	2.25	2.27	2.61	3.06	4.52		2.94
70	1.69	2.84	3.21	4.44	4.72	6.58	3.91
							3.63*

* : 10・20代の世帯主の畑地をのぞいた平均

結果を表4に示した。休耕地がまったくない世帯が、33世帯中9世帯を占めていた。そのうち5世帯が、10・20代の青年を世帯主にする世帯で、これは調査対象とした10・20代の世帯主のすべてであった。休耕地の面積の割合が0～30パーセントまでのものが33世帯中23世帯を占め、それ以上の畑地を休耕しているのは10世帯であった。労働力不足で手がまわらなかったという理由で、あるいは連作したので地力を回復しようとの理由で、休耕する畑地ができていた。休耕地も、所有権を確保するために、短期間の内に栽培を再開する。本報告では、休耕地も使用中の畑地とあわせて畑地の一部として検討をすすめていく。10・20代の独身世帯主は、自分の畑で得た生産物だけで生活しているのではない。親族や友人の家で食事をともにすることもしばしばであったので、彼らの生計は彼らの畑地の面積だけでは論じがたく、以下の考察からは除外した。

調査対象になった世帯が所有している畑地面積を、世帯主の年代別に表5に示した。世帯主が30代以上の世帯の畑地面積の平均は3.63 ha になった。世帯主の年代別の畑地面積の平均は、50歳代で畑地面積が最大になった。それ以上の高年齢になると、畑地面積はより小さくなり、60歳代で落込みがみられた。Kruskal-Wallisの検定法 [石居 1975: 133] で、世帯主の年代別の畑地面積を検定する。帰無仮説を、「年代による差はない」とすると、 $0.05 < P < 0.10$ となる⁴⁾。有意水準を0.05にとれば、帰無仮説を捨てることができない。したがって、畑地面積の年代差によって論を進めること

4) KRUSKAL-WALLIS の検定法のための検定量 H は、

$$H = 12/N(N+1) \sum_{i=1}^k R_i^2/n_i - 3(N+1) \text{ で求める。}$$

N は対象となる観察値の数、ここでは28。k は世帯主の年齢区分の数、ここでは5。R は畑地面積が小さいものから各観察値に順番を付け、各年齢区分ごとに順番の数を合計したもの。表5では $H = 8.100489$ となる。この値を自由度 $4 (= k - 1)$ の χ^2 分布の表を用いて検定する。帰無仮説を捨てることのできる確率 P は、0.1 と 0.05 の間にあることが分かる。

は有効ではない。畑地の面積は、各世帯ごとの事情を反映した個別的な差と考えるべきである。

それぞれの世帯の畑地面積に注目すると、最小は 0.47 ha、最大は 9.12 ha と、差が大きいことに注目される。1 世帯あたりの畑地面積の最高は、9.12 ha で、40代の世帯主の世帯が所有していた。この世帯は、次節で述べる世帯員 1 人あたりの畑地面積も、調査対象中最大で 3.04 ha にのぼった。この世帯の構成は夫婦と子供 1 人で、他の子供は独立して他所に住んでいた。畑は 2 筆で、1 筆は屋敷地に接しており、他は屋敷地から 1.7 km 離れていた。後者は、もともと兄の世帯が所有していたもので、尾根をとりまいて広がり、7.04 ha にも及ぶが、調査の時点では 3 分の 1 程度しか利用していなかった。2 筆の畑を合わせても、使用中の畑地の割合は全体の 41 パーセントにしかならなかった。

10・20代の世帯主の世帯を除いて、1 世帯あたりの畑地面積の最低は 0.47 ha で、30代男性が世帯主になっていた。彼は妻と 4 人の子供と生活していた。世帯員 1 人あたりの面積は 0.079 ha となり、これも調査対象中最小であった。彼は、1987年に村の土地から入手した畑と、父親から一時的に借用している畑の 2 筆を耕していたが、どちらも小さな畑であった。彼は CCM⁵⁾ の村の書記をして、月給を得ていた。

2) 1 人あたりの畑地面積

1 人あたりの畑地面積を求めるために用いた世帯構成人員は、調査時に生計を同じくしていた家族員数である。小学生は 1 人として数え、小学校入学前の者は人数の計算から除いた。各年代の世帯あたりの平均構成人員は、4.0~7.7 人であった (表 6)。

表 6 世帯構成員 1 人あたりの畑地面

畑世帯主の年齢 (歳代)	1 人あたりの畑地面積 (ha)						1 世帯あたりの 構成人数 (人)
10・20	0.16	0.22		0.73	2.32	2.77	1
30	0.079*	0.48*	0.60	0.71*	1.47		4.0
40	0.23*	0.33	0.42	0.55	1.03	3.04	4.8
50	0.25	0.41	0.50	0.65	1.34	2.66	7.7
60		0.31	0.45		1.13		7.4
		0.32					
		0.33					
70	0.35	0.56	0.85	1.32	2.36	1.61	4.3

*: 畑地の一部を借用している世帯を示す

5) タンザニア唯一の政党, Chama Cha Mapinduzi のこと。

世帯主の年代ごとの世帯構成人数には有為な差はない⁶⁾。同様に, 1人あたりの畑地面積も, 世帯主の年代による有為な差はない⁷⁾。したがって, 畑地面積においても, 世帯ごとの個別の差が大きいたることになり, その分布を表6に示した。1人あたり0.1 ha未満の世帯から, 3.0 ha以上の世帯まで変異に富んでいることがわかる。

世帯員1人あたりの畑地面積の最高は3.04 haで, 40代の世帯主をもつこの世帯は, 世帯あたりの畑地面積でも最大であった。休耕地の割合は59パーセントであった。また, 1人あたり2.66 haの畑を所有する50歳代の世帯主は, 屋敷地に接した畑地のほか, 0.9と1.0 km離れた合計3筆の畑を所有していた。1.0 km離れた畑は, 7.0 haで, そのうち3.7 haは休耕していた。彼は全畑地面積の46パーセントを休耕していた。この2世帯は, 広い土地を確保した上で, その一部しか使用していないのである。

1人あたりの面積が小さい世帯では, どのように生活をたてているのであろうか。CCMの書記の例はすでに述べたが, 他の1人あたり0.3 ha未満の面積の世帯が2例あった。そのうち1世帯は40代の世帯主で, 小さな畑を6筆所有していた。そのうちの2筆は知人から借用していた。この世帯主は, ルイファ村の南4 kmほどの村で生まれ, 1961年に仕立屋の店だけをルイファ村内に開いた。その当時も, 自分が出生した村内にある畑を所有していたが, 1975年にそこを引きはらい, ルイファ村内の畑地を入手した。彼のミシンを用いての仕事は, シャツやズボンが裂けたのをなおす程度である。もう1例は, 50歳代の大工が世帯主で, 彼は家の前に簡単な小屋がけをし, 椅子や食器棚などをつくっていた。家の普請を手伝い, 一時的に稼ぐ大工も村内に多数いるが, この男の場合は建具に専門化しており, 仕事も恒常的におこなっていた。

村人は町に出かけた時, あるいは, 近くの村でたまたま日用品が販売されていた時に, これを仕入れ, 村内で小売して利益をあげていた。青年たちはタバコ, 灯油, 乾電池を売っていた。壮年の男たちは干し魚, 肥料などを, マーケットや酒場で売ったり, 訪問販売をしたりしていた。また, 女性も酒作りにせいを出していた。これらの小遣い稼ぎは彼らにとって日常的なことである。これに対して, 上記の3名の世帯主のおこなう仕事はそれぞれ書記, 仕立屋, 大工と専門的なものである。

1人あたり0.30~0.39 haの畑面積をもつ5世帯の内, 1世帯の世帯主は40歳代で, 以前から500 kmほど離れたMtera湖(図4)で魚をとり, ルイファ村に運んで売りさばいていた。調査時には, 隣村で開かれる週1回のマーケットで, 酒, 焼肉, 生肉を売っていた。残りの4名の世帯主は, 目立った副業はおこなわず, ほとんど農耕だ

6) Kruskal-Wallisの検定法で確かめると, $0.2 < P < 0.3$ である。

7) Kruskal-Wallisの検定法で, $0.3 < P < 0.5$ の値になる。

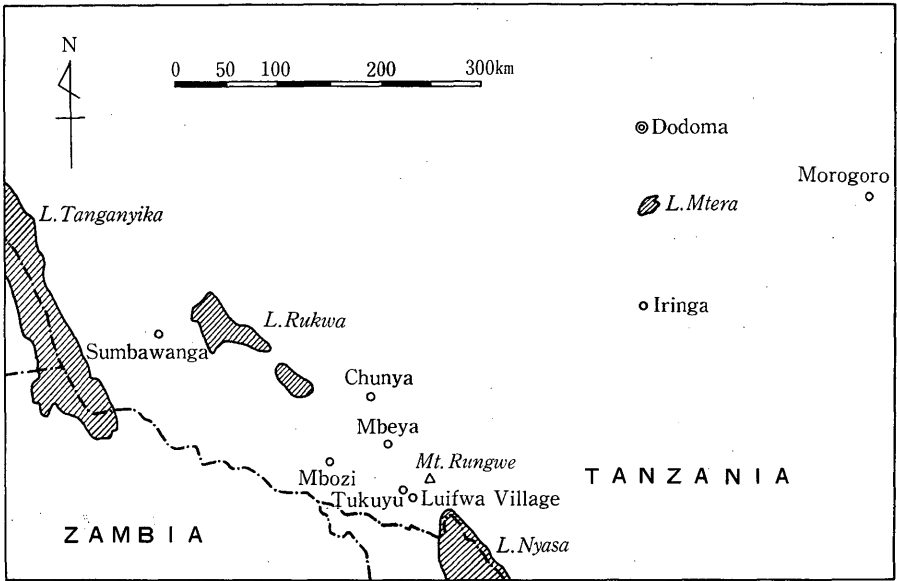


図4 タンザニア南西部

けで生活していた。このことから、誰にでもできる小遣い稼ぎはしながらも、農耕を主体にして生活していくためには、1人あたり0.30 haほどの畑地があればよいと考えられる。

0.3 haを目安にして、1人あたりの畑地面積の分布に注目してみると、その10倍にもおよぶ畑地をもつ世帯までであることに注目しておく必要がある。他人から畑地を借用している世帯主は、全体でわずか4世帯だけであった(表6)。その世帯主は30代か40代で、当然のことながら、1人あたりの畑地面積が小さい世帯であった。広い畑をもつ世帯が、休耕中の畑地を積極的に多くの世帯に貸し出している様子はなく、畑地の貸借は小規模に知人間でおこなわれていた。

3) 畑地の筆数と位置

各世帯の畑地の筆数を表7に示した。1筆だけの世帯は2世帯あり、これらは10・20代の独身青年の世帯であった。ニャキュウサのほとんどの世帯は、複数の畑地をもつが、その数は多くはなく、せいぜい4筆までであることが分かった。

調査対象のなかで、一番多くの畑をもっていたのは50歳代と30歳代の男性で、それぞれ9筆であった。前者の畑は、一筆一筆の面積は小さくなく、9筆の合計面積は3.26 haであった。調査対象とした世帯の畑地面積の平均は3.63 haであったから

表7 1世帯あたりの畑の数

世帯主の年齢 (歳代)	1戸あたりの畑の数(筆)									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均
10・20	2	1	1	1						2.2
30		1	1	1		1			1	4.8
40		2			1	2	1			4.7
50			3	1	1				1	4.5
60		4					1			3.0
70		2	2	2						3.0
合計	2	10	7	5	2	3	2	0	2	

各欄の数字は、世帯数を示す

(表5), この男の畑地は9筆といえども、面積は平均的な広さであるといえる。調査時に、5人の世帯員であったので、1人あたりの畑地面積は0.65 haで、これも平均的な値である。この男は3 kmほど離れた村からルイファに1981年に移住してきた。その年に村から比較的小さい畑4筆、合計0.89 haを入手した。翌1982年に、父系親族にあたる老人から、1筆0.87 haの畑地を入手し、1985年に友人から1筆0.43 haを、1986年には前記の老人から1筆0.615 haを、1987年には2人の友人から2筆、合計0.458 haの畑地を入手した。村からの土地を入手する方法については5章1節で報告する。

もう1人の9筆の畑を所有する男性は、5人の世帯員で、合計3.55 ha、1人あたり0.71 haの畑地をもっていた。彼の畑地には、1970年代に入手し、現在でも使用しているものが3筆あった。これらは、村から譲渡されたもの、兄から譲渡されたもの、購入したものがそれぞれ1筆ずつであった。1980年代になってから入手した畑地が4筆あり、そのうちの2筆は、160 kmほど離れたChunya(図4)の金鉱に出稼ぎに行った友人から借料なしで借りたもので、もう1筆は知人、他の1筆は父の弟から譲り受けた。残りの2筆は村から譲渡されたものだが、正確な入手の年は不明だった。

それぞれの家から畑地までの距離を測った。5万分の1の地形図、高度計、コンパスを用いて、家と畑の位置を地図上に定め、両者の直線距離を測定した。畑地に接し

表8 屋敷地から畑までの距離

	畑までの距離(km)					
	0	0.1 ~0.5以下	0.6~1.0	1.1~1.5	1.6~2.0	2.1以上
畑の数(筆)	35	41	20	19	7	1

各欄の数字は、あてはまる畑の数(筆)を示す

て屋敷地がある場合は、畑と家の距離は0 mとした。結果を表8に示す。まず、123筆中35筆の畑が家から0 mのところ、つまり家のすぐまわりにあることが分かった。また41筆は家から0.1~0.5 kmの範囲にあり、0.5 km以内の合計は123筆中76筆にのぼった。一方、2.1 km以上離れた畑地は1筆しかなかった。このように、畑地と家はかなり近いところにあることが分かった。

5. 土地の入手

1) 入手方法

青年たちは結婚する前の10代あるいは20代に畑地を獲得する。もし父親の畑地に余裕があれば、青年たちは、父親の畑地の一部を自分の畑地にし、家を建てる。この場合は、青年たちの家の場所は、父親の畑地の場所によって決定されてしまうことになる。父親が十分に広い畑地をもっていない場合には、青年は村の会議に、畑地を譲渡してくれるよう申し出る。結婚が近い若者や、村への移住者が、畑地の譲渡願いを文書にして村の議長に提出すると、議長は会議を開催する。この会議の構成員は、CCMの村の議長(Mwenyekiti wa Kijiji)、書記(Katibu wa Kijiji)、23人の議員(Wajiunbe wa Kijiji)である。彼らが、畑地譲渡の諾否や、畑地の具体的な場所を決める。いままでの所有者が村外に移住して、4年以上使用されていない土地が、申請者に譲渡される。

使用者がいない土地の1筆の面積が大きい場合には、5、6人の青年に割り当てられることもあった。このような土地には青年たちの小屋が集まり、あたかも年齢村ができたかのような外観を呈した。この小屋の集まりでは、世帯主が小学校卒業直後の者から、既婚の30歳代の者まで、年齢の幅が広く、まとめ役も存在していなかった。なによりも集まって小屋を建てている青年は少数にすぎず、伝統的な年齢村とは言えないものであった[栗田 1987: 628]。

世帯主の年代区分ごとの土地の入手方法を表9に示した。表中の数字は該当する畑地の筆数を示す。123筆の畑地中110筆について入手方法を明らかにすることができた。借用あるいは金による購入の例はわずかで、110筆中98筆は無料で譲渡されていた。年代別には30代、40代で借用が目立つ程度で、あとは大きな差はなかった。無料で譲渡された98筆の畑のうち、46筆が親族から入手されており、その内訳は、父から28筆、父の兄弟から5筆、兄から8筆、弟から1筆、それ以外の父系親族から3筆、母から1筆であった。

村の会議に申請して入手したものは32筆にのぼった。他の首長国からの移住者への

表9 畑地の入手方法・入手先

入手方法	無料で譲り受ける				購入	借用	合計	世帯数
	親族	姻族	知人	村	知人	知人		
世帯主の年齢(代)								
10・20	6	1	3		1		11	5
30	7		2	8	1	3	21	5
40	10		7	6		4	27	6
50	13	1	2	7	1		24	6
60	5	1	3	4			13	5
70	5			7	2		14	6
計	46	3	17	32	5	7	110	33

各欄の数字は畑の数(筆)を示す

土地の譲渡は、伝統的には、グレイト・コモンナーが実際の土地の割り当てをした。

知人から入手した畑地が17筆と大きい割合を占めた。これに対して、姻族からの入手は計3例にすぎなかった。

無料で譲渡される以外の入手法として、借用が30代と40代の世帯主たちで7例みられた。借用は知人の間のみで行なわれた。このうち、5例は都市に働きに行った知人から、留守中の畑の管理が委ねられているものであった。したがって、知人が村に帰ってきた場合には、すみやかに畑を明け渡す約束になっており、借地料は支払われていなかった。

金による畑地の購入の例は全体で5例あり、70代の世帯主も購入した畑をもっていた。購入先は、必ずしも以前からの知人とは限らなかった。畑地が売買されるようになったのは、次節で示すように、1970年代以降の現象である。かつては土地そのものを売買することはなく、畑に植えられている栽培植物を売買した結果、土地の使用者が変わることから土地の売買が始まった。この場合の作物はとうぜん多年生植物で、コーヒー、カカオなどだった。1987～1988年の調査時でも、なにも栽培されていない土地は売買の対象にならない、と考えている人が多かった。実際の売買は3世帯についての5筆しか観察されていないが、売買した土地はいずれも休耕地を含んでいた。ニャキュウサ・ランドでも、土地だけの売買は着実におこなわれつつある。

土地を購入した3世帯中の1世帯は、22歳の独身男性で、彼は1年後の結婚をひかえて、1987年に近く住む老人から購入した。この老人は妻と死別し、調査当時は一人暮らしであった。第2の例は、38歳の世帯主とそれ以外の4人の世帯員からなり、1977年に畑地を購入した。第3は約70歳の老人の世帯主で、1974年と1984年に出生した村

から離れた場所に畑を購入し、家族を二分して住ませている⁸⁾。

自分が居住していない村の土地を入手するのはむずかしい。そこで、こんな場合には、以下のような方策がとられていた。まず、目あての村に住んでいる友人に依頼し、その友人が村から土地の譲渡を受ける。そして、その土地を友人から譲り受けるのである。あるいは、他村の友人宅に居候して、数カ月をすごし、村の人びとにこの村で暮らしたいことをアピールし、おもむろに村の会議に畑地の所有を願い出る。このような方法をとる場合は、最終的には畑地を得た村に住み着くことが前提となっている。

2) 入 手 時 期

入手先がわかっている110筆の畑地のうち100筆について、入手した時期を明らかにすることができた(表10)。親族や村から入手した畑のなかには、1940年代にまで入手時期がさかのぼるものがあった。一方、知人からのものは1960年代から、購入したものは1970年代から、借用したものは1980年代に入ってから観察された。これらの年代以前に購入や借用があったとしても、この表には現れてこない場合もある。なぜなら、この調査は、それぞれの畑地を現在の所有者が獲得した時の方法を知ることが目的で、それ以前の所有者交替の方法には注目されていないのである。しかし、聞き込みによって、購入は1970年代よりさかのぼることはないことがわかった。

それぞれの世帯主の畑は、彼らは何歳のときに入手したものであろうか。各畑地を入手した時点の世帯主の年代を表11に示す。調査の時点で、70代の世帯主の畑の多くは、彼らが40代、50代の時に入手したことに注目される。なかには60代になってから畑地を入手した事例もあった。70代の老人も、彼らが20代で結婚したときには、独立

表10 畑を入手した年代

入手方法	無料で譲り受ける				購入	借 用	合計	
	親族	姻族	知人	村	知人	知人		
入 手 し た 年 代	1980	17	2	8	9	3	7	46
	1970	13	1	4	11	2		31
	1960	5		2	6			13
	1950	4			3			7
	1940	2			1			3
	合計	41	3	14	30	5	7	100

各欄の数字は畑の数(筆)を示す

8) この場合は、初めの世帯の定義(同一屋敷地内に居住している人びとのおつまり)にあてはまらない。本報では、購入した方の畑地のそばに住んで、その畑に依存している人びとと世帯主にのみ注目して、1人あたりの畑地面積などを算出している。

表11 畑地を入手した時期

世帯主の現在の年齢 (歳代)	現在の畑地を得た年齢 (歳代)					
	10	20	30	40	50	60
10・20	7	3				
30	4	6	9			
40		7	8	9		
50	4	2	2	8	7	
60	1	1	5		4	2
70	1		1	6	3	1

各欄の数字は畑の数(筆)を示す
 現在は1筆の畑であるが、入手した年代が部分によって異なる畑地があるので、畑地の表中の筆数の合計は101筆になる。

した世帯を維持するのに十分な広さの畑をもっていたはずである。ところがその同じ畑地をもち続ける例は少なく、多くは他人に譲渡していた。70代の世帯主の合計12筆の畑のなかで、10代のときからもち続けている畑は、わずか1筆であった。

つまり、人びとは10代ではじめて畑地を入手するが、その畑地を一生にわたってもち続けるのではない。畑地を手放したり、譲られたりを繰り返して、50代、60代になるまで、畑地の譲渡と入手にかかわりをもち続けているのである。

1913年生まれの子は、1943年から5年間は、イギリス軍隊の兵士としてナイロビにいた。1948年にルイファ村に住居を定めて農耕を営むようになった。しかし、彼は1950年にはMboziに行き(図4)、それ以後、Mbozi, Sumbawanga, ルイファ村を行き来して、1962年にルイファに落ち着いた。この男の場合、農耕で生活し始めた1948年、35才のときには、生活に必要な面積の畑地をもっていたはずである。ところが、彼はそれからすぐに他地域に行ってしまう、ニャキュウサ・ランド内の土地は手放した。そして、1962年にルイファ村に戻った時点で4筆の畑地をあらたに入手した。つまり調査時点の畑地は、彼が49歳になってから入手したものである。

1919年生まれの子の他の子は、調査時点で2筆の畑地をもっていたが、1筆は1931年に、他の1筆は1962年に手にいれたものであった。調査時点では70歳近いこの男は、今まで数多くの畑地を入手したり、譲渡したりしてきた。1931年には彼は12歳で、この畑地は彼が今までに入手した畑地の中でもっとも初期に入手したものであり、これ以後も、20代、30代とそれぞれの時期に畑地を入手したはずであるが、それらは手放されてしまった。もう1筆の畑地は、彼が43歳と中年になってから入手したものであった。

3) 畑地の所有と人の移住

前節で例示した1913年や1919年生まれの子のように、本人がニャキュウサ・ランド

表12 人の移住

世帯主の年齢 (歳代)	不動	N.L. 内	国内	国外	不明	N
10・20	1	(1)	2	1	1	5
30			3		2	5
40		(1)	(2)	4	2	6
50		3		1	2	6
60	1	2	(1)	1	1	5
70		2(1)	(1)	1	3	6
合計	2	7	5	8	11	33

N.L.: ニャキュウサ・ランド

各欄の数字にあてはまる世帯主の数を示す。ただし、ある世帯主が国外にも、国内にも、ニャキュウサ・ランド内でも移住している場合は最も広域の欄にのみ数字を入れた。

() 内の数字は記載してある欄よりも広域の移住ですでに挙げてある世帯主の数を示す。

を離れたため、畑地を手放す例がみられた。多くの人びとがタンザニア国内、国外で移住を繰り返しており、ニャキュウサ・ランドへの出入りのときに畑地の入手、譲渡にかかわった。そこで、世帯主のライフ・ヒストリーを移住の観点から整理しておくことにしたい。ここで“移住”とは、仕事や就学のために2カ月以上、出生した村以外で居住する場合を言う。村外での仕事は、就業期間の予定がはっきりしないことが多い。既婚者は、家族を伴って移住することが普通なので、出稼ぎとは言えない。

33名中22名の世帯主について、彼らの移住についての記録が得られた。22名中20名と多くの世帯主が移住していることが、表12から明らかである。とくに国外にまで移住した人は、移住の経験をもつ20名中8人を占めていた。22名の世帯主のなかで、村外へ一度も程住したことがないのは、2名だけであった。人びとの程住先としては以下のようなところがある。南アフリカ共和国に多くの人びとが鉱山労働者として出かけていたが、1963年に禁止された [M. WILSON 1976: 402]。調査時点では、ザンビア、ボツワナなどに働きに行っている例があり、その多くは、自動車の修理工や鉱山労働者などをしてしていた。タンザニア国内では、ルイフェから90 kmほど離れたMbeya や、ダル・エス・サラームに働きに行き、一部の人はMtera湖の湖岸に小屋がけをして漁労に従事し、魚を薫製にして売っていた。Mbeya からザンビアの国境方向に向かって70 kmほどの高原地帯、Mboziに入植してトウモロコシ栽培をする者、Mbeya から70 kmほどのChunya (図4) で金探しをする者、鉄道の保線工事をする者もいた。青年たちのほとんどはChunyaに出かけた経験をもっていた。

彼らは Chunya に出かけると, 1 カ月から数年とどまり, 金を掘ったり, 鋤夫たちにタバコや清涼飲料水を売って現金を得た。

ニャキュウサ・ランド内の移住としては, より冷涼なところ, またはより温暖なところを求めての移住例が少なくなかった。移住先で土地を譲渡してもらったり, 購入したりして住み込んでしまう。たとえば, 1939年にルイファ村で生まれた男は, 調査時点では父親の屋敷地から数百メートルのところに自分の屋敷を構えていたが, 20歳のときにザンビアに行き, 金鋤で働いていた。3年後の1962年からはタンザニアに戻って, 10年間ダル・エス・サラームで小売業などを営んだ。1972年からはタンザニアの中部の都市, Morogoro (図4) で, 貨物列車に貨物を積込む仕事に従事した。こうして, 1974年にルイファ村に戻ってきたのである。この間, 1~2カ月という短期間ルイファ村には戻ったことはあったが, 20歳以後の15年間は出生地から遠く離れて生活していたわけである。

6. 考 察

1) 土地不足の検討

ニャキュウサ・ランドでのこれまでの畑地面積に関する報告を表13に示す。P. H. ガリバーは1955年に調査をおこない, 当時は1世帯あたり5人の構成人員であったとしている [GULLIVER 1958: 11]。したがって, 世帯員1人あたりでは 0.08~0.26 ha となる。1968年に P. M. ヘッケンらは数カ所の村で調査をおこなった。表13にあげた Ilolo での1世帯あたりの構成人員を P. M. ヘッケンらは示していないが, 同時期に山地部の村でおこなった調査結果では1世帯あたり平均4.5人の人びとが住んでい

表13 ニャキュウサ・ランドでの畑地面積の調査結果

調査年	場 所	世帯あたりの面積 (ha)	出 典
1935	Lake-shore plain	2.48 大人1人あたり0.25~0.80	[M. WILSON 1963: 55]
1955	Lake-shore plain	0.40~1.30	[GULLIVER 1958: 15]
1968	Ilolo	1.90*	[HEKKEN and VELZEN 1972: 26]
1987	Luifwa	3.63	[栗田 本報]

*: Hekkenはそれぞれの土地所有者についての畑地面積は示していない。彼は各畑地面積の範囲(たとえば1~2エーカー, 2~3エーカーなど)に何人の土地所有者が含まれるかを, 表で示しているだけである。そこで, たとえば, 1~2エーカーの範囲に含まれている所有者については, 全員1.5エーカーの畑を所有しているとして, 1世帯あたりの所有畑地面積を報告者が算出した。

たという [HEKKEN and VELZEN 1972: 19]。もし、平地部の Iloilo でも世帯構成人員が同じであれば、1人あたり 0.42 ha の畑地面積になる。報告者が1984年に調査したときには、ニャキュウサ・ランド外で生活している者を除いて、1世帯あたり、5.5人の家族員がいた [栗田 1987: 623]。この場合は1人あたり 0.66 ha の畑地面積になる。1人あたりの畑地面積は、報告者が調査した1987～1988年の結果のほうが、従来の調査結果より、かえって広い。

これは、調査地が異なることによると考えられる。P. H. ガリバーが調査したのは、土地不足が早くからおこっていると指摘されていた平地部であった。M. ウィルソンはニャキュウサ・ランド内で広く調査を行なったが、彼女が畑地面積のデータを示しているのは、平地部での場合であった。それに対して、報告者が調査をおこなったのは山地部であり、土地に余裕があるので、1950年代には、まだ平地部から人びとが移入し続けた地域である [GULLIVER 1958: 18]。

P. H. ガリバーによれば、一般に土地不足がすすむにしたがって、父親は自分の息子にのみ畑を譲ろうとし、兄から弟へ、あるいは父の兄弟から甥への相続は少なくなるという [GULLIVER 1958: 21]。ところがニャキュウサでは、親族から入手される畑地46筆のうち、14筆はおじ一甥、または兄一弟、のつながりで相続されていた。これは、畑地の獲得に関して、まだ余裕があることを示している。また、村から無料で譲渡される場合は110筆中の32筆を、知人から無料で譲渡される場合は同じく17筆と大きな割合を占めていた。

畑地は1人あたりどの程度の面積があれば、生活に十分なのであろうか。農耕以外の現金収入の有無から検討した結果、1人あたり 0.3 ha が、農業だけにたよって生活していくことが可能な最小の面積であるとの結論を得た。10・20代の世帯を除いた25世帯中22世帯と、調査地域の世帯のほとんどが、この境界線以上の面積の畑地をもっていた。

食事の内容は、主食の回数でみると、主食とみなされる食事を636回とった内、ウガリが205回、バナナが185回、コメが158回を占めていた。主食となる食物として、ウガリ、バナナ、コメ以外にも、イモ類などがとられているが、これらの摂取回数は合計で88回と少ないので、以下の計算からは除外する。ウガリ、バナナ、コメが食事として供される回数に比例したカロリーを提供しているとすると、ウガリの原材料となるトウモロコシ、煮たり焼いたりして食べられるバナナ、米飯とされるイネが、食事回数に比例するカロリーを供給するためには、三者の畑地面積の割合は、205/9699:185/17734:158/5523 になる⁹⁾。

0.3 ha の畑地をこの割合で各作物が占めるとすれば, 0.105 ha, 0.052 ha, 0.143 ha となり, この面積の畑地で作られた作物からは1日あたり 2,730 kcal の熱量が得られる¹⁰⁾。クラークとハスウェルは世界の各種の自然環境のもとでの必要熱量を示している。彼らによれば, アフリカ中央部の場合, 1日4時間労働する男は 1,792 kcal, 8時間労働する男は 2,012 kcal の熱量が必要である。また, 実際に摂取されている平均的な熱量は, タンガニーカで 2,175 kcal, ケニアで 2,240 kcal であるとしている [CLARK & HASWELL 1966: 14, 17]。これらの値と比較して, ニャキュウサ・ランドでの 2,730 kcal は十分に大きいと考えられる。

農業によって生活している他の民族集団は, どの程度の面積の畑地を使用しているのであろうか。ケニアのキクユ人は mountain forest & grassland の植生帯に住み [PHILIP 1985: 51], ミレット, バナナ, トウモロコシ, 豆類を中心に農耕をおこなっている。1902年のタイラーの調査では, 彼らは標高 1,500~2,000 m 付近では, 1世帯あたり 1.48 ha の畑地を使用していた [TAYLOR 1969: 468]。キクユ人の平均的な男性は2人または3人の妻をもち, 畑地面積が 2.00 ha を越えることは少ない [TAYLOR 1969: 469]。夫と妻2人, 子供4人の家族を想定すれば, 1.48 ha の畑地は1人あたり 0.21 ha, 2.00 ha の畑地は1人あたり 0.29 ha となる。

ザイール東部の山地林帯から熱帯多雨林帯への移行地域で, 標高 1,000~1,700 m の地域に住んでいるテンボ人は, 根茎類, バナナ, トウモロコシ, サイトウを栽培している。彼らは, 一夫一婦の世帯で 0.60~1.00 ha の畑地をもっているという [末原 1984: 517]。末原が調査した村では, 全体で455人, 96家族が住んでいる [1984: 482]

9) トウモロコシの調査地での収量は 1.0 ton/ha であり, 玄穀粒 100 g あたり 354 kcal の熱量を供給する [科学技術庁資源調査会 1978: 86-87]。したがって, 1 ha のトウモロコシの畑地からは, 1日あたりにして 9,699 kcal の熱量を得ることができる。バナナのニャキュウサ・ランドでの収量は調査できなかったが, Ngugi ら [1978: 95] によれば, ウガンダでの平均的なバナナ畑での収量は 1 ha, 1年あたり 12 ton, よく整備されたプランテーションでは, 50~60 ton/ha-year であるという。また, Acland [1971: 14] は東アフリカでのバナナの平均的な収量として, 15~20 ton/ha-year, よく整備され, 灌漑されている畑では 38~50 ton/ha-year の数字をあげている。12 ton/ha-year の数字をニャキュウサ・ランドにあてはめれば, 1 ha のバナナ畑から1日あたり 32.9 kg のバナナが収穫される。果皮などの廃棄される部分の重量の割合を32%とすると, これから得られる熱量は 17,734 kcal になる [庄古 1983: 127]。イネの収量は 0.6 ton/ha で, 1 ha の畑地からの収穫物は, 1日あたりにして 5,523 kcal の熱量を供給する [科学技術庁資源調査会 1978: 78-79]。したがって, 同一の面積から得られる熱量の比は 9699:17734:5523 である。3種類の作物から得ている熱量は, その作物を食事として回数を比例するとすれば, トウモロコシ, バナナ, イネが供給する熱量の比は 205:185:158 である。この比になるための, 各作物の畑地の面積の比は, 205/9699:185/17734:158/5523 である。全体の畑地面積が 0.3 ha であれば, トウモロコシ, バナナ, イネの畑地面積はそれぞれ, 0.105 ha, 0.052 ha, 0.143 ha になる。

10) 各作物が供給する熱量の計算の仕方については脚注9の前半部分を参照。

ので、平均すると1家族あたり4.7人の家族員ということになる。1人あたりの面積にすれば、0.13~0.21 haになる。

ニャキュウサと同じタンガニーカ・バンツ系系のトングウェ人は、年間降水量1,000~1,500ミリのウッドランド (woodland) に住んでいる。掛谷 [1974: 38]によれば、標高1,500~1,600 mに住むトングウェの畑地面積は、1人あたり0.27 haである。

M. B. グリーヴと H. P. ホワイトは、西アフリカのいくつかの農耕民の資料を検討した。彼らは、農耕民の生存には1人あたりの畑地面積が、森林地帯では0.2 ha、サヴァンナ地帯で0.3 haあるいはそれ以上必要であると結論している [GLEAVE & WHITE 1969: 279]。そして実際には現金収入のために、換金作物を栽培する畑がこれ以外に必要なると述べている。

佐々木 [1970: 117] は、東南アジアのいくつかの焼畑農耕民の研究事例を紹介している。彼によれば、台湾、フィリピンのミンドロ島、ビルマ、ラオス、マレーシアのサラワク、北部インド、西南日本など、栽培する作物の構成や自然環境が異なっているにもかかわらず、構成員を5人とする平均1家族あたりの畑地面積は、1.4~1.8 haの範囲におさまるとしている。構成員1人あたりになおせば、0.28~0.36 haとなる。

これらの民族の使用している畑地の面積の平均と比較しても、ニャキュウサ・ランドで農耕によって生活していくのに必要な1人あたりの畑地面積として0.3 haをあげたのは、妥当であると考えられる。

本報ではニャキュウサ農民の所有する畑地の土地所有を、ニャキュウサ・ランドで以前におこなわれた調査結果、相続の仕方、彼らが兼業する他の職業、収量からの熱量計算、他民族との比較、の各観点から点検した。その結果、山地部では、切迫した土地不足とは判断されないと結論づけることができる。土地不足とは判断されない山地部でも age village の崩壊は現実におこっている [栗田 1987: 628]。したがって、M. ウィルソンのように、土地不足と age village の崩壊を因果関係で結びつけることはできない。

本報では age village の崩壊の要因を特定することはできないが、以下のようなさまざまな要因が、それぞれの時代にはたらいていたことが示唆される。新しく age village がつくられていく過程では、それぞれの age village の構成員が使用する土地を確保するために、首長国内の土地の再編成が必要であった。これを阻む要因は土地不足だけではない。キリスト教がニャキュウサ・ランドに入ってきた19世紀末期から20世紀初めにかけては、ニャキュウサ人のキリスト教徒は、教会周辺にコロニーをつくって生活していた [M. WILSON 1963: 42, 131]。彼らは伝統的な coming out

を伴う age village からは除外されていった。20世紀前半の植民地政府のもとでは、首長は一定の司法上の役割を与えられたにすぎなく [1963: 38-39], 多年生の作物や恒久的な家をもちはじめた農民の抵抗をおしきって首長国を分割, 再編成する力はなかった。同じく20世紀前半から現在に至るまでみられる人びとの頻繁なニャキュウサ・ランド外への移住は, 同年齢集団としての age village のまとまりを失わせてしまう。

2) 畑地の入手・譲渡と人の移住

ニャキュウサの農民が, 老年に達するまで継続的に畑地の入手・譲渡に関係し続けるのは, 所有者本人の移住が, 大きな原因であると考えられる。人びとの頻繁な移住は, ニャキュウサ社会では伝統的社会から続いてきた特徴である。19世紀のニャキュウサの伝統的社会では, coming out のとき, 各年齢村の居住地, 放牧地, 畑地が再編成され, 人びとは首長国内で移動をしていた。G. ウィルソンによれば, 伝統的社会でも, 年齢村を離れて, 他の首長国へ移っていった者もいた [G. WILSON 1968a: 33]。1度出て行った者をもとの首長国の村に連れ戻す方法も様式化され整っていた。ある男が村を出ると, 村人たちは彼の新しい居住地を2カ月以内に訪ねた。彼の持ち物をつかんで, 戸外に持ち出す仕草をして, 彼がもとの村に戻ってくるように誘い, もとの村の人びとは彼に好感をもっており, 彼が病気の原因だと思っているウィッチなどはいないことをわからせようとした。村を出た男が, グレイト・コモンナー, 有力な呪医, 古くからの家系を引く男などの場合は, この訪問は1回では終わらず, 数年にわたって続けられた。この呼びかけが受け入れられるか否かは, 彼の健康状態, 新しい村での人間関係の状態などに左右された。

20世紀に入って, ニャキュウサ社会で age village の形成による土地の再編成が機能しなくなってからも, 人びとはさまざまな要因で移住し続け, 畑地の入手, 譲渡の原因となっていた。まず, 経済上の理由で移住をする場合がある。M. ウィルソンによれば, 1930年代から1950年代にかけては Rungwe District 内の男性の4分の1は出稼ぎに出ていた [M. WILSON 1976: 402]。これは, 調査時の一時点をとった場合である。現在はニャキュウサ・ランドに戻ってきていても, 今までに出稼ぎを経験したことのある者を累計したら, これよりはるかに大きな割合になるはずである。また, 1930年代には, 1回の出稼ぎは数カ月間であったものが, 1950年代には1年, あるいはそれ以上の期間にわたるようになったという [1976: 402]。1980年代にも多くの者が移住をしていたのは, 本報で述べたとおりである。

健康上、あるいは呪術にかんする原因で移住する者もいた。この場合も畑地の入手・譲渡を伴うのは同様である。M. ウィルソンは、伝統的社会では呪術への恐れが移住の主な原因であったとしており、よい畑地を求めての移住は二次的なものにすぎないと述べている [M. WILSON 1963: 36]。P. M. ヘッケンらによれば、彼の調査地 Iloilo では、109世帯中33世帯が、1950～1968年の間に他村から移住してきたという [HEKKEN and VELZEN 1972: 100]。33世帯が移住してきた理由の内訳は、11世帯が畑地、または賃労働を求めてであり、10世帯が病気、あるいは隣人とのトラブルでもとの村を出てきた。7世帯は親族、あるいは教会の仲間をたよって来たもので、5世帯は相続人として村に入ってきた。呪術に関するものは、上記の10世帯の中に含まれていると考えられる。P. M. ヘッケンらは、1968年の調査時に調査地の人びとは、呪術師を発見するために、witch finder を招いたと報告している [HEKKEN and VELZEN 1972: 32]。Witch finder は、呪術師と目される人物の家に入って行って、衣装箱などを開けてしまい、中から証拠品として呪術道具を見つけ出し、誰が呪術師であるかを明らかにした。

1980年代に、報告者の調査地付近で呪術に関係する理由で村から移住する者の数は、はっきりとはわからない。しかし、呪術師の存在は、ニャキュウサ人にとって実感をもって感じられ、現在でも居住場所の選択要因になっていた。

経済上の理由であれ、呪術上の理由であれ、出生地を移ることは頻繁にみられる。G. ウィルソンは、1930年代の調査から、その当時キリスト教徒以外の既婚男性の少なくとも80パーセントは、自分がはじめて入手した畑のある首長国から離れて、他の首長国内に移住していると述べている [G. WILSON 1968a: 32]。本報では、1980年代では、移住経験がある世帯主20名に対して、移住をしたことがない者は2名であることを示した。

ニャキュウサのように、移住によって畑地の所有者が変わる例は、アフリカの各地でみられる。たとえば、スクマとニャムウェジの社会でも、人の移住を要因とする畑地の入手・譲渡がみられた [SHIPTON 1984: 120-128]。スクマ-ニャムウェジ人は、タンザニアに居住して首長国を形成し、居住地域に基づく土地所有の形態をとっている。彼らの社会では、人の移住が頻繁で、それにとまって畑地の所有者が頻繁に変化している。シプトンはこれらの民族で人が移住する理由として、よりよい土地を入手するため、隣人との粉争や呪術師を避けるため、きれいな首長やヘッドマンから逃がれるためなどをあげ、墓をつくったり、墓所を頻繁に訪れる慣習も定着していないので出生地から離れることに人びとの抵抗は少ないとしている。さらに、彼は、人び

との頻繁な移住をうながす相続方法上の理由を挙げている。スクマとニャムウェジの社会では厳格な長子相続がとられており、畑地を分割することはできない。したがって、長子以外の者は、父親の畑地の相続を期待することができない。彼らは自分が使用する畑地を求めて移住し、しばしば他の首長国にも入り込むのである。

ニャキュウサ社会で、所有者の移住以外の理由、たとえば、今までの所有者の死亡は、相続人が畑地を獲得することは説明できても、畑地を加齢につれて手放してしまうことが説明できない。また、所有者の老衰によってもこれは説明できない。ニャキュウサの社会では父親が老衰しても彼の畑はその子供が管理して畑作を続けるべきである、とされており [M. WILSON 1963: 50, 1977: 98], 老衰だけでは畑地を手放すことは考えにくい。

P. M. ヘッケンらは、ニャキュウサ社会に、畑地に関してパトロンクライアントの関係が存在しているという [HEKKEN and VELZEN 1972: 31]。このパトロンクライアント関係が存在すれば、パトロンの采配によって、畑地をクライアントの間で循環させることもできる。しかし、報告者の調査地ではパトロンクライアント関係は認められなかった。調査対象となった33世帯の内、4世帯で土地の借用が見られたにすぎない。また、土地を貸し出すことによって村内での政治的な地位を固めようとする者も見られなかったのである。

謝 辞

本報告のもととなった調査は、文部省科学研究費補助金による調査「東部アフリカと中・西部アフリカにおける民族文化の変容過程に関する比較調査」(代表: 和田正平 国立民族学博物館教授)に参加して行なわれた。

タンザニア国内で調査をすすめる、本報告を執筆するにあたっては非常に多くの方々にお世話になりました。調査地のルイファ村では多くの方に生活全般にわたって助けていただいた。調査許可の取得と現地での円滑な調査の遂行に関して National Museum of Tanzania の Dr. F. T. Masao (Director) と Tanzania Commission for Science and Technology の Professor A. S. Msangi (Director General) と Mrs. A. E. Lyaruu からの確かな助言をいただいた。和田正平先生とはタンザニアで一緒に行動していただく機会もあった。本報の内容については、伊谷純一郎先生(京都大学アフリカ地域研究センター・センター長)に懇切に討論していただいた。また、国立民族学博物館の共同研究会「アフリカ諸民族の技術誌の整理と分析」のメンバーの方々、野外民族博物館リトルワールドの研究員諸兄にも討論していただいた。以上の方々へ深く感謝を表します。

文 献

- ACLAND, A. D.
1971 *East African Crops*: FAO.
- THE AFRICAN CLIMATOLOGY UNIT (ed.)
1961 *Climatological Atlas of Africa*. Lagos: CCTA/CSA.
- CHARSLEY, S. R.
1969 *The Princes of Nyakyusa*. East African Publishing House.
- CLARK, C. & M. HASWELL
1966 *The Economics of Subsistence Agriculture*. Macmillan. (First Published in 1964)
- GLEAVE, M. B. & H. P. WHITE
1969 Population Density and Agricultural Systems in West Africa. In M. F. Thomas & G. W. Whittington (eds.), *Environment and Land Use in Africa*, Methuen, pp. 273-300.
- GULLIVER, P. H.
1958 *Land Tenure and Social Change among the Nyakyusa*. Kampala, Uganda: East African Institute of Social Research.
- HAMER, J.
1986 Hierarchy, Equality, and Availability of Land Resources: An Example from Two Ethiopian Ensete Producers. *Ethnology* 25(3): 215-228.
- HARTLEY, B. J.
1938 Land Tenure in Usukuma. *Tanganyika Notes and Records* 5: 17-24.
- HECHT, R. M.
1985 Immigration, Land Transfer and Tenure Changes in Divo, Ivory Coast, 1940-1980. *Africa* 55(3): 319-336.
- HEKKEN, P. M. VAN and H. U. E. THODEN VAN VELZEN
1972 *Land Scarcity and Rural Inequality in Tanzania: Some Case Studies from Rungwe District*. Mouton.
- 石居 進
1975 『生物統計学入門』 培風館。
- 科学技術庁資源調査会(編)
1978 『三訂補 日本食品標準成分表—穀類編』 大蔵省印刷局。
- 掛谷 誠
1974 「トングウェ族の生計維持機構—生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5(3): 3-90。
- KNIGHT, C. G.
1974 *Ecology and Change: Rural Modernization in an African Community*. New York: Academic Press.
- KURITA, K.
1986 Residential Pattern of the Nyakyusa People in Tanzania. *Little World Studies* 8: 1-17.
- 栗田和明
1985 「タンザニア・ニャキュウサ族の家」『リトルワールド』14: 4-9。
1985 「展示活動報告—タンザニア ニャキュウサ族の家」『リトルワールド年報』6, 7: 66-68。
1987 「ニャキュウサ族の家と居住形式」和田正平編著『アフリカ 民族学的研究』同朋舎, pp. 609-630。
- LWOGA, C. M. F.
1985 A Villagers' Struggle for Self-determination. In R. G. Abrahams (ed.), *Villagers, Villages and the State in Modern Tanzania*, Cambridge: Centre for African Studies, pp. 55-80.

- MALCOLM, D. W.
1953 *Sukumaland: An African People and Their Country*. Oxford University Press.
- MANSHARD, W.
1974(1968) *Tropical Agriculture: A Geographical Introduction and Appraisal*. Longman.
(First Published by Bibliographisches Institut)
- MURDOCK, G. P.
1959 *Africa: Its Peoples and Their Culture History*. McGraw-hill book.
- NGUGI, D. N., P. K. KARAU and W. NGUYO
1978 *East African Agriculture: A Textbook for Secondary Schools*. Macmillan.
- NYERERE, J. K.
1966 *Freedom and Unity: A Selection from Writings and Speeches*. Oxford University Press.
- OLIVER, R., et al.
1981 *The Cambridge Encyclopedia of Africa*. Cambridge University Press.
- OMARI, C. K.
1980 Villagization and Potential for Peasant: Reorganization in Tanzania. In S. Fukuda (ed.), *Tanzania: Political Party, Rural Development, Nationalism and International Environment*, The Social Science Team of the Association for African Studies, Nagoya University, pp. 39-62.
- OMINDE, S.
1975 *The Population of Kenya, Tanzania and Uganda*. Nairobi: Heinemann.
- PHILIP, G.
1985 *Modern College Atlas for Africa*. London: Philip, G. & Son Limited.
- RUTHENBERG, H. (ed.)
1968 *Smallholder Farming and Smallholder Development in Tanzania: Ten Case Studies*. Munchen: Weltforum Verlag.
- 佐々木高明
1970 『熱帯の焼畑』 古今書院。
- SHIPTON, P.
1984 Lineage and Locality as Antithetical Principles in East African Systems of Land Tenure. *Ethnology* 23(2): 117-132.
- 末原達郎
1984 「テンボ族の焼畑農耕」伊谷純一郎, 米山俊直編著『アフリカ文化の研究』アカデミア出版, pp. 479-522。
- 庄古光治
1983 『四訂版 日常食品栄養価早見表』医歯薬出版。
- TAYLOR, D. R. F.
1969 Agricultural Change in Kikuyuland. In M. F. Thomas & G. W. Whittington (eds.), *Environment and Land Use in Africa*, Methuen, pp. 463-493.
- UNITED NATIONS
1986 *Demographic Yearbook 1986 vol. 38*. United Nations.
- WILLIAMS, C. N., W. Y. CHEW and J. A. RAJARATNAM
1980 *Tree and Field Crops of the Wetter Regions of the Tropics*. Longman.
- WILSON, G.
1936 An Introduction to Nyakyusa Society. *Bantu Studies* 10: 253-292.
1951 The Nyakyusa of South-western Tanganyika. In Elizabeth Colson & M. Gluckman (eds.), *Seven Tribes of British Central Africa*, Oxford University Press, pp. 253-291.
1968a(1938) *The Land Rights of Individuals among the Nyakyusa*. Manchester University Press. (First Published by the Rhodes-Livingstone Institute.)
1968b(1939) *The Constitution of Ngonde*. Manchester University Press. (First Published by the Rhodes-Livingstone Institute.)
- WILSON, M.
1950 Nyakyusa Kinship. In A. R. Radcliffe-brown & D. Forde (eds.), *African Systems of*

- Kinship and Marriage*, Oxford University Press, pp. 111-139.
- 1959 *Communal Rituals of the Nyakyusa*. Oxford University Press.
- 1963(1951) *Good Company: A Study of Nyakyusa Age-villages*. Beacon Press. (First Published by the Oxford University Press.)
- 1976 *Zig-Zag Change*. *Africa* 46(6): 399-409.
- 1977 *For Men and Elders: Change in Relation of Generations and of Men and Women among the Nyakyusa-Ngonde People 1875-1971*. African Publishing Company.